

ハニの生命観

欠端 實

— 聖樹崇拜を中心として —

はじめに

ハニ族の居住地域は、現在では、中国雲南省、ヴェトナム、ラオス、ミャンマー、タイの五か国に分断された形になっている。筆者はタイ、中国のハニを調査してきたが、小論では中国のハニを中心にして聖樹崇拜をとりあげ、ハニの生命観の一端を考察したい。雲南のハニの居住地区は大別して紅河地区とシーサンパンナ地区とに分けられる。

ハニ文化の特色の一つは森の文化である、ということが出来る。ハニは高地に住む森の民である。ハニの人々は、聖なる祖霊と善霊とが寄り住むとみなされる山や森の近くに村を作る。村を作るときには山や森のシンボルとしての聖樹が選ばれ、村のセンターとされる。小論では、

一、村建てにおける聖樹選定

二、現在の聖樹祭

三、聖樹の性質

(一) 生命力としての聖樹

(二) 樹木を祖先とする神話(信仰)

(三) 祖先神、守護神としての聖樹

という順序にしたがって聖樹の性格を考察しながら、ハニの生命観の一端を探りたい。

一、村建てにおける聖樹選定

ハニは現在でも山腹に村を作って居住していることが多いが、社会状況の変化に伴って移住はほとんどみられなくなっている。

以前は焼き畑に従事していたために二十年か三十年に一度、新しい村に移らねばならなかった。新しい村では、まず村作りの儀式が執り行われた。その儀式の一つに聖樹選定の儀式があった。ハニの村作りの儀式は次のようにして行われた。⁽²⁾
「村を定め住居をきめる」ことをハニ語でプーズウーダイズウーという。歴史的に、ハニは遷移を繰り返してきた民族であり、中国西北の高原から雲南西南部地帯に移動してきたことに関しては大量に資料が残されている。ハニ族は稲作農耕を主たる生産様式とする民族であり、移り住んだ居住地域ではどこでも、村を造って、なるべく安定した農耕生活ができるようにしなければならなかった。そこで昔から、村建てに關して整備された儀式が伝承されてきたが、大要は次のようなものである。

第一の儀式は、村の場所の選定である。選定の基準は、村のテッペンに山があること、しかも村の神を祭ることのできる森があること。村の中心には年寄りの憩いの場所になるような鬱蒼とした空を覆うような大樹がなければならぬ。麓には子供たちの遊び場になるような茂った森がなければならぬとされた。

「紅河兩岸のハニ支系では、村の場所として、四冊が山で囲まれた窪地を選ぶのが一番良い。最低限、東西が山に面して

いなければならない⁽³⁾」と言われ、シーサンバナナ地区においても「村の場所の選定には、その付近が南向きで樹木が茂っていて村のセンターになり得るかどうかを観察する⁽⁴⁾」とされた。ハニの村は山林ともにもあることが必須の条件であった。

第二は「村の中心」を定めることである。村の中心に据えられるのが聖林であり聖樹である。そしてこの聖樹のシンボルとして石が置かれる。同時に一本ないし数本、時には十本の柱が打ち込まれる場合もある。「村作りの当日は、祭司は、新しい村の中で四方八方に鉄くず（シオンチェジャイという）を撒く。その後地面に鶏の卵を投げる。卵が飛び散った所に木の杭を一本立てる。これをプハダという。杭の場所が村のセンター、つまり祭司の住む所となる⁽⁵⁾」。神の山において神の森、聖樹を選定した後、元の村から担いで来た長方形の石板を、盛大な儀式で聖樹の下に安置する。以後、村の神の祭祀のために用いられる。これが村の神聖さのシンボルとしての神石である。一般的には、ハニ族はどこへ移動していくにせよ、必ず村の守護神のシンボルである石板を携えていかなければならない。

村の移動によって当然ながら聖樹は変更を余儀なくされるが、神石は従来のもを新しい村まで運び、新たに選定された聖樹の下に安置する。

ハニの場合、聖樹が選定されると同時に、更にそのシンボルとしての神石が安置される。聖樹と神石とは一対のものとして双方共に存在する。しかし民族によっては聖樹の選定だけの場合もあり、ただ単に神石が置かれるだけの場合もあり、あるいはまた柱が立てられる場合もある。ダイ族は、大青樹を聖樹とするが、神話によれば創世紀の英雄が村の中央に紅石をすえつけ、周囲に十本の柱をたてて村の中心とし、人類の中心を定める柱とした。村の中心としての紅石は人格化されて神霊となり、氏族の指導者の化身とみなされるようになった⁽⁶⁾。

ワ族の場合は、聖樹の根元に数個の石が置かれるが、それをシャンという。シャンとは宝あるいは村の宝という意味である。

プーミー族は村に聖樹があるばかりではなく各家にも聖樹がある。チュワン族は英雄樹を聖樹としている。チンポー族は大青樹を聖樹としている。ペー族も聖樹をもっている。

雲南の鶴慶、賓川、武定、大姚等の県の彝族は聖樹として松、柏、栗、ツツジ等三十種以上も有している。涼山の彝族は三節の燃えない柴を祖霊のシンボルとしている。

ジノ一族は三本の杭を村の中心とし、三本の大青樹を聖樹として⁽⁷⁾いる。

第三は境界を定めることである。「村の場所が決まり、村作りの当日、祭司は村のセンターに一頭の犬、一羽の鶏をつなぎ、杭の所で犬を棒でたたき殺し、血を流している犬を引きずって付近をグルリと走る。犬の血が染み込んだ所が、村の境界線となる。ハニの人々は、犬の血が染み込んだ範囲内は神霊の加護があつて、あらゆる悪霊の化身は出入りできなくなると堅く信じている。たしかに、村の中はハニの人々だけの清浄な地域と考えられている⁽⁸⁾。」

村は人間の住む清浄な世界たるべきものと観念されたが、それは犠牲獣の血によって清められる。しかし村という聖なる空間は、思うに、犠牲獣の血によってのみ浄化された空間というのではなく、後述するように、聖樹の浄化力によって聖化された空間でもあつたと考えるべきである。

第四は、村の境界を定めた後、家を建てる儀式をしなければならぬ。柱、梁、たるき、草の天井、ドア、框、壁の土台、基礎等いずれもそれぞれ異なった複雑な儀式が求められる。「村人はまず祭司が家を立てるのを手伝う。その他は各自が場所を選び、各自が材料を用意し、たがいに助け合つて、順次家を立てて行く。村の場所が選定されてから、吉日を選んで村の門（神門）を立てる⁽⁹⁾。」

以上、ハニにおける従来の村建て儀式の骨格部分のみを紹介してきたが、そのまとめをしておきたい。

村が作られる場所としては、四方が山に囲まれているところが理想の地とされる。村の神を祭るには樹林が必要とされ、聖林が画定される。そして村の中心には大樹がなければならぬ。この大樹が村の神の化身とみなされる。ロミ（ハニの一支系）の人々は「村に聖樹がなければ、死んだ人間がふたたび生れかわれないし、生まれかわった人間もすぐ死んでしまう⁽¹⁰⁾」という。聖樹は「万物の母⁽¹¹⁾」である。この聖樹を祀る祭がアマトゥ（後述）である。

聖樹を祀る際には地の神が祀られたり、聖樹のシンボルとしての神石の下に供物が埋められる。こうしたことは聖樹が神

霊の降下する依代としての意味ばかりではなく、大地の生命力の顕現されたものとしても考えられていたことを示すものである。

村作りの際には、村の中心にあたるべき所に木の柱（杭）が立てられ、犠牲の犬がグルグル巻きにされ撲殺される⁽¹²⁾。犬の血液は土地を聖化するとされ、また神そのものとも見なされる。その血によって聖なる空間が画定され、その内側が村の範囲とされる。ただし村が聖なる空間として維持されるのは犠牲獣の血液にのみ依存するとは考えられない。基本的には聖樹がもっている生命力、その延長としての浄化力によって悪霊が排除されるものとみなされたとしてよいであろう。

同じハニでも聖樹に対する意識には厚薄がある。紅河地区の場合、聖山崇拜から発達したと考えられるところの、守護神としての聖樹に対する意識が強い。守護神としての聖樹に祈願することによって、永遠の生命を与える聖樹の効能に触れることができ、そのことによって聖なる空間としての村の安全が保たれると考えているように見える。シーサンパンナ地区では、聖樹はあるものの、それに対する意識が薄い。したがって聖なる空間としての村の安全を守るために、村に通ずる道々に悪霊の侵入を防ぐ鳥居形の神門（ラクン）を作ろうとしたように見える。これがシーサンパンナにおいて神門（ラクン）建設が発達した理由と考えられる。

二、現在のアマトゥ（聖樹祭）

現在でも紅河地区を中心として、聖樹の祭（アマトゥあるいはアンマトゥ）が行われている。ただし近年だんだん簡略化される方向にある。私が一九九三年三月に見ることができたアマトゥも、文献などに記されているものに比べると随分簡略化されていた。

最初に紹介するのは、内部資料であるが、七日間にわたるアマトゥの内容を記録したものである。⁽¹³⁾

(一) 緑春県チォリー村のアンマトゥ

チォリー村のアンマトゥ行事は毎年旧暦正月の第一の牛の日の夜に始まる。一九八八年のアンマトゥ行事の時間は旧暦の二月七日の晩、井戸（泉）を掃除することから始まった。

① 井戸（泉）の神を祭る。

② 祖先を祀る。二月八日、虎の日、朝早く家々では鶏を割く。午前九時ごろ、各家ではもち米のバーバー（もち）をつきあげ家庭の主婦は祖霊の位牌に供える。

③ 次に地の神ミーソンを祭る。昼の十一時ごろ、祭司は各戸の男性メンバーを従え、祭品七種を持つ。祭場は、村の神アンマ樹の林の、一本の真っすぐに伸びた大樹の下が選ばれる。この大樹は、村の人達がすすくと育ち、男女ともについてまでも美しいことをシンボライズしている。

祭司はアンマ樹に着いてから、木の根にある神石を洗い清め、神石の前に栗の木で作った三層の祭壇を組む。上段は地の神ミーソン、中段は村の守護神アンマ、下段は村を作った始祖に捧げられる。

④ 最後に村の神アンマを祭る。祭司はアンマの林に出かけ、村の神プーカーアンマ（プーカーは村の意）を祭る。地勢がやや高くて平らな村のテッペンの中の密林の中に村の神アンマの位置を決める。

祭祀に参加する人がアンマの林に到着すると、祭場を清め、柴を探して来て、竹壁に石屋根の小屋を作る。この小屋は地の神ミーソンを祭る所から十メートルほど離れた所にある。祭司は小屋の中の柱に小さい竹箒（ハニ族の祖霊のシンボル）を掛ける。村の神アンマの祭祀は、十二方の精霊（ツォンルォ）を祭ること、村の神を祭ることの二つの内容からなっている。

精霊の祭祀では、村の神アンマの祭壇から三十メートル離れた大樹の下に、三層の祭壇がしつらえられ、十二方の精霊を招いて祭品を供える場所とされる。祖霊と一緒に各各方面の精霊を呼ぶシンボルとして、地面に小さい竹箒が置かれる。祭司は各方面の精霊がここへ来て、人々とともに一緒に祭りの日を祝うようにと唱える。以下は省略する。

(二) アイマトウ(イ)

ハニ語のアイマトウは「村の神を祀る」という意味である。ハニ族における最大の宗教的祭典であり、旧暦の二月に、三日ないし五日間行われ、「アイマ祭」ともいわれる。アイマというのは昔、ハニの人々のために村を守り、手柄を立ててくれた女性英雄であって、後に村の神となったのである。村の神に関する由来には幾つかの伝説があり、もっとも広く知られているものの一つに次のようなものがある。

昔人間を食って生きるだけの「ツェドアウォー」という悪魔がいた。悪魔は、毎年二月二人の若者を殺し、首をはねて祭れと求めてきた。人々はいうなりになるしかなかった。寡婦のアイマに二人の子供を差し出す順番がまわってきた。アイマは子供たちの命を守ろうと、ある方法を考え、もし悪魔がもう人を殺さないなら、毎年娘を二人届けるといふ条件を出した。悪魔は承知した。二月が近付いて、アイマは二人の子供を女装させ、こっそりと刀を持たせて、嫁入りさせた。魔王が酔いつぶれていた隙に、二人の子供は、魔王の胸にある永遠の生命の秘密をもつ白い毛を覆い隠しておいて、刀を抜いて魔王を殺した。以後災難がなくなった。人々はアイマに感謝して、彼女がなくなつてから木を村の守護神として、森を神の住む聖林とした。そして森のなかの一番大きな真つすぐに伸び上がっている木をそのシンボルとして、毎年二月の第一の竜の日に祭祀をとりおこなっている。

アイマトウの祭りは次のように行われる。

① プーマトウ。「プーマ」は「村」のことで、「プーマトウ」は「村を守る神を祀る」ということである。祭司は鶏・鴨・豚の心臓・肝臓・頭・足の肉をすこしづつ三枚の小皿にとり、神石の下の土中に埋める。

② プーラークウ。「村の神の霊を招く」ことであり、あるいは又「村にいる悪霊を追い払う」ことである。女装した若者二人によってアイマの故事が再現される。

③ ランニージーゾサ。「新しく生まれて来た子供を祝って設けられた酒宴」である。新生児をもつた家の聖樹にたい

する報告である。

④ アイツォトウ。「聖林の祭」である。聖樹のある聖林全体の祭祀であり、おわって聖林で直らいが行われる。以上二つの、現在も執り行われているアマトウに関する記述から、つぎのようなことが解る。

アマトウはハニの人々にとっては新年の祭であり、年間を通じて最大の祭である。祭の場所は神の森であり、特に森の中の聖樹の下でとりおこなわれることが共通している。

さて緑春鼎の場合、村の守護神としての聖樹を祀ること、これが眼目であろう。しかしアマトウにおいて祀られる神は井戸の神、祖先神、地の神、精霊、村の神、おし(聖)の神、淵の神、福の神、穀物の神、火の神、疫病払いの神、火消しの神、天の神とまことに多く、アマトウの祭祀の中に村人の日常生活を守るあらゆる神々が網羅されている観がある。

緑春鼎のアマトウにおいて、聖樹の下、約五十メートル離れたところに神門が更新される。その上二人の姉妹神がこの門を守ってくれるという。ここに見られるのは、聖樹に宿る聖なる力の喚起への願いであり、拡大・拡張への願いではなからうか。新年を迎えて、改めて聖なる空間に聖なるエネルギーを充溢させ、ひいては悪霊を退散させようとしたものであろう。大地や聖なる森に宿る神霊の力を、一本の聖樹に引き寄せ、その聖なる力を村中に満たそうとした、これが原初の姿だったのではあるまいか。

また聖樹を守るものとして姉妹神が考えられていたり、聖樹そのものが女性英雄アイマの化身であると信じられてきたり、聖樹と女性神とがセットとして考え信じられてきたことも注目される。

墨江のハニは聖林をフーマーと呼び、アマトウの祭りをフーマトウという。⁽¹⁵⁾フーは村の意でフーマトウは村の女神を祀るということになる。祭司をフーピーというが、ピーはおす、男の意味であり、明らかにフーマー(村の女、女神)とフーピー(村の男、祭司)とが対になっている。墨江では聖樹が女神として強く意識されていることを物語っている。そしてフーマトウの日には祭司は女装しなければならぬという。その意味するところは明瞭ではないが、上記の聖樹を守る姉妹神と通ずるものを考えてもいいのだろう。

さらにまたアマトウやフーマトウの祭祀に際しては女性の参加が禁止されるが、結婚してまだ子供に恵まれず子供をほしいと願っている夫婦は、特に参加が許可される。ここにも、豊饒多産を約束してくれる聖樹の、女性性が顕われていると考えられる。このことから敷衍して考えたとき、聖樹のシンボルとしての神石は、逆に男性を象徴するものとみることが可能である⁽¹⁶⁾。いずれにしても聖樹は本質として女性のイメージが強い。

三、聖樹の性質

以下、ハニを中心にしながら関連の民族の聖樹崇拜をとりあげ、その性格を考えたい。

(一) 生命力としての聖樹

雲南省金平県大寨区一帯のハニ(ロメイ支系)の人々はラバイラバ樹を聖樹とする。常緑の闊葉樹で、一枝の節に三葉ついているところから三葉樹ともいわれている。三葉樹を煎じた汁は起死回生の力をもつとされていて、祖先に供えればその魂体は永生となるとされる。

シーサンバナナ地区のハニ(アイニ)はホンマオ樹を聖樹としている。病人が出たときには、一家の主が茅草をもって樹の前に立って祈り、茅草を聖樹に結ぶ。こうすることによって病人の身体にも常緑樹となる液体が注入され、病が癒え丈夫になると考えられている。こうした病気の治し方は「叫魂」といわれる。そのためホンマオ樹は叫魂樹ともよばれている。紅河、元陽、緑春、金平県地区のハニの人々は、起死回生の力をもつ聖樹はその力を樹木全体におよぼしている⁽¹⁷⁾ので、聖樹のある林地に村や宅地があれば、人間は旺盛な生命力を聖樹によって付与されると考えている。

プーミー族もどの村にも聖樹があり、各家にもそれぞれの聖樹がある。成人式をあげた少年は、自らのシンボルである羊毛を首からはずし、たくましく茂っている樹に結び、樹自体を自分とみなす風習を残している⁽¹⁸⁾。

羌族は今でも樹木の生命と自己の生命とを同一視する觀念を有している。一九三〇年代においても羌族には始祖とみなされている杉にたいして叩頭礼拝した。ある地方では生まれた子供を樹木にくくりつけ、子供が木の成長同様、命がいつまでも永らえるよう願ったという⁽¹⁹⁾。

(二) 樹木を祖先とする神話 (信仰)

ハニの人々が聖樹に生命力が宿り、人間もその力に預かることができると考える理由は何か。それは彼らの世界観、宇宙観において、樹木と人間の祖先は同時にこの世に生まれたと考えられているからである。

ハニの人々が各自の系図、家譜を六十代、七十代と暗記していることは有名である。その家譜において、人類と樹木はいずれも第三十一代のホアランツォの子孫とされている⁽²⁰⁾。遠い昔のハニの人々にとっては、樹木と人類は同じく強い生命力をもった兄弟だったのである。その後人間は一代の命が短くなったが、樹木の方は万年も枯れなかった。そこで人類は祖先を同じくする古樹に向かったとき、一方では遠い祖先の魂に思いを馳せ、他方では万年常緑の秘訣を手にと望んだ。人は三葉樹の緑をいのちのシンボルと考え、人生もまた三葉樹のようにありたいと渴望する。そのため、子供が生まれたときは、両親はふもとの樹林の傍らで三本の小枝を切ってくるという。ドウアン族も彼らの神話において最初の女性は樹の葉から生まれたとしている。ミャオ族では神話中の始祖は楓樹である。したがって今日でも楓樹で家の中柱をつくるという。哀牢山脈の彝族の九隆神話では、水中の沈木を人類の祖先としている⁽²¹⁾。

(三) 祖先神、守護神としての聖樹

上記の(一)、(二)を合すると、聖樹が人間に生命力を付与する(その延長として悪霊を払いのける)という考えと、遠い昔に樹木と祖先を共通にしていたという神話(信仰)から、聖樹は一族の祖先神であり同時に守護神でもあると認められるようになり、冠婚葬祭がそのつど聖樹のまえでとり行われるようになったのではないかと考えられる。

雲南省石屏の彝族は龍樹を聖樹とするが、樹下に龍宮を作る。高さ五十センチ位の木あるいは石作りの龕の中には、彝族の祖先アロンの化身（両端が楕円形の天然石）が祀られている。聖樹が祖先神と結び付けられていることが示されている。⁽²²⁾

ナン族は、かれらの中でもっとも重要な祭天の儀式において、ハンイバオター樹（ナシの神話中、もっともめでたいとされる樹木）に見立てられた松の木に花飾りをほどこし、プタ共同体（祭天共同体。氏子のようなものか）に属する家庭の中で、その年に子供が生まれた家や、あたらしく嫁取りした家族は、聖樹にひざまづいて礼拝叩頭する。昔は、プタ共同体の人々は、子供が満十三歳になった年に成人の礼として、聖樹の前でズボン（スカート）をはく儀式を行わなければならなかった。この儀式は「バーリブ」といわれた。⁽²³⁾

チュワン族は石をもって村の神のシンボルとするが、初生児が村の神を礼拝してはじめて家族の真正のメンバーとなることができることとされた。初生児はこの世に生まれおちて肉体的に家族のメンバーになり、村の神（社神）を礼拝してはじめて、肉体と精神が一緒になって家族のメンバーになるとされた。⁽²⁴⁾

ナン族の嫁取の際の儀礼、チュワン族の初生児の際の儀礼はいずれも、中国殷代の習俗を彷彿させる。すなわち「安」という文字の原義は、新しく嫁してきた婦を、その家廟に入れて廟見の礼を行い、祖霊にその安寧を求めることであったと解されている。また「字」という文字は、家廟に子の出生を報告する儀礼を示しており、この礼によって家族の一員としての資格が認められ、字（あざな）がつけられた。⁽²⁵⁾ 殷代の例から推せば、チュワン族の例もナン族の例も、新たに加わった家の祖霊に報告することによって新しく加入したものの霊が浄化され、祖霊を受け継ぐことによって家の一員としての資格を得ようとしたものであると考えられる。

結び

ハニは森の民である。人間に比し長寿を保つ樹木の生命力を畏敬し、これにすがってその生命力に同化しようとした。こ

うして聖山崇拜、聖林崇拜が生まれて来たものであろう。さらに樹木と祖先を同じくするという信仰によって、一層樹木の生命と自己の生命、一族の発展とを同一視する傾向が強化され、やがて聖樹は祖先神とも考えられるようになったのである。樹木が宿す生命力は悪霊をも払いのける力をもつと観念され、聖樹、聖林に守護された村は聖なる空間たることができるとされた。こうして聖樹は守護神としての性格も有するようになる。

聖樹崇拜は世界至るところに見られるものであろう。しかしハニおよびそれに近接する民族の聖樹崇拜とそこに示されている生命観には、いろいろなバリエーションがありながらも、いずれも日本の古代文化と共通するものが多い。筆者はハニならびに関連の民族の調査を今後も深めて行き、将来、伊勢神宮に伝承されてきた文化との比較を試みたいと考えている。

注

- (1) 拙稿『ハニ社会における聖なる空間』（麗沢大学、一九九四年）。
- (2) 以下史軍超が『中国各民族宗教与神话大词典』（学苑出版社、一九九〇年）において紹介した記事をもとに述べていく。
- (3) 楊万智『祈生与御死』（雲南大学出版社、一九九一年）。
- (4) 同上。
- (5) 同上。
- (6) 楊知勇『西南民族生死観』（雲南教育出版社、一九九二年）。
- (7) 同上。聖樹のシンボルとしての神石についても多く紹介されている。
- (8) 注3参照。
- (9) 同上。
- (10) 同上。
- (11) 同上。
- (12) 同上。
- (13) 『彩嵐情声』（緑春県民季・緑春県文化局、一九九二年）。詳しくは注1参照。
- (14) 注2参照。

- (15) 王爾松「哈尼族紀年与節日」(中央民族学院学報、一九九三年一期)。
注6参照。
- (16) 注6参照。
- (17) 注3参照。
- (18) 注6参照。
- (19) 汪青玉「羌族的祭壇、神樹及其信仰觀」(中南民族学院学報、一九九三年三期)。
注3参照。ただし三十一代は三十四代の誤りか。
- (20) 注6参照。九隆説話は『後漢書』西南夷伝。
- (21) 注6参照。
- (22) 注6参照。
- (23) 注6参照。
- (24) 注6参照。
- (25) 白川静『字統』(平凡社、一九八四年)。

(麗沢大学外国語学部・東洋文化史)